

四国中世史研究会・戦国史研究会編

『四国と戦国世界』

岩田書院 二〇一三・五刊

A5 二五〇頁 二八〇〇円

本書は、二〇一二年八月に高松市の香川県立ミュージアムで開催された四国中世史研究会三〇周年記念シンポジウム「四国をめぐる戦国期の諸相」の成果をまとめた論集である。

本書の構成は以下のとおりである。

橋詰茂「発刊にあたって」／山田邦明「戦国の活力」／丸島和洋「戦国大名武田氏と従属国衆」／浜口誠至「足利義植後期の幕府政治と御内書・副状」／天野忠幸「織田・羽柴氏の四国進出と三好氏」／山内治朋「毛利氏と長宗我部氏の南伊予介入」／大西由子・橋詰茂編「全体討論」／山田邦明「あとがき」／四国中世史研究会編「四国戦国期研究文献目録」

「発刊にあたって」「あとがき」では、四国中世史研究会・戦国史研究会が合同でシンポジウムを主催することになった経緯や、広い視野から先のテーマについて討議すべく両会より報告者を選んだ意図などが説明されている。

基調講演にもとづく山田論考は、「東瀬戸内地域の視点から」を副題とするが、おもに讃岐の香西氏と阿波の三好氏に着目し、両氏と畿内の政治史との関連性を説いている。

続いて、パネリストの報告にもとづく四論考が配されている。

丸島論考は、甲斐国衆の穴山氏・小山田氏の国衆領支配や外交を検討し、戦国大名武田氏と国衆との関係を再整理する。穴山氏の外交を詳述し、両氏は国衆としての自律性を維持する一方で、譜代化が進展して武田家中に包摂されてゆく二面性を有していたと論じる。

浜口論考は、足利義植後期の御内書・副状を分析し、都鄙交渉の運営体制を考察する。都鄙交渉は副状発給者である在京大名の細川高国・大内義興と將軍直臣の伊勢貞陸が連携しつつ運営しており、この三者が当時の幕府政治の中核であったことなどを指摘している。

天野論考は、織田信長の対四国政策においては一貫して阿波三好家との関係こそが課題であったと主張する。年代比定をめぐる論争の対象となっている五通の羽柴秀吉書状について提示された新説―天正八（一五八〇）年説―などで早くも話題を呼んでいる。山内論考は、副題「喜多郡争乱をめぐる芸土関係」も示すように、伊予の「喜多郡争乱」に対する毛利氏・長宗我部氏の政策と両氏の関係が変容してゆく過程との関連性を考察する。喜多郡を、天正一二年の両氏決裂に影響を与えた「境目地域」として重視している。

「全体討論」は、川岡勉氏の司会によるパネルディスカッションの記録である。多様な質疑応答は興味深い。惜しむらくは名高い戦国期守護論者が司会に専念したことか。

一九七〇～二〇一二年を対象とした巻末の文献目録は戦国期四国に関する研究の軌跡を知るために簡便であり、この目録もまた

本書の必備・必読の度を増している。

(津野倫明)